

# 脱炭素社会への道を拓いた COP28 ～その成果と課題～

2024年2月3日  
NPO法人地球環境市民会議（CASA）  
専務理事 早川光俊（弁護士）

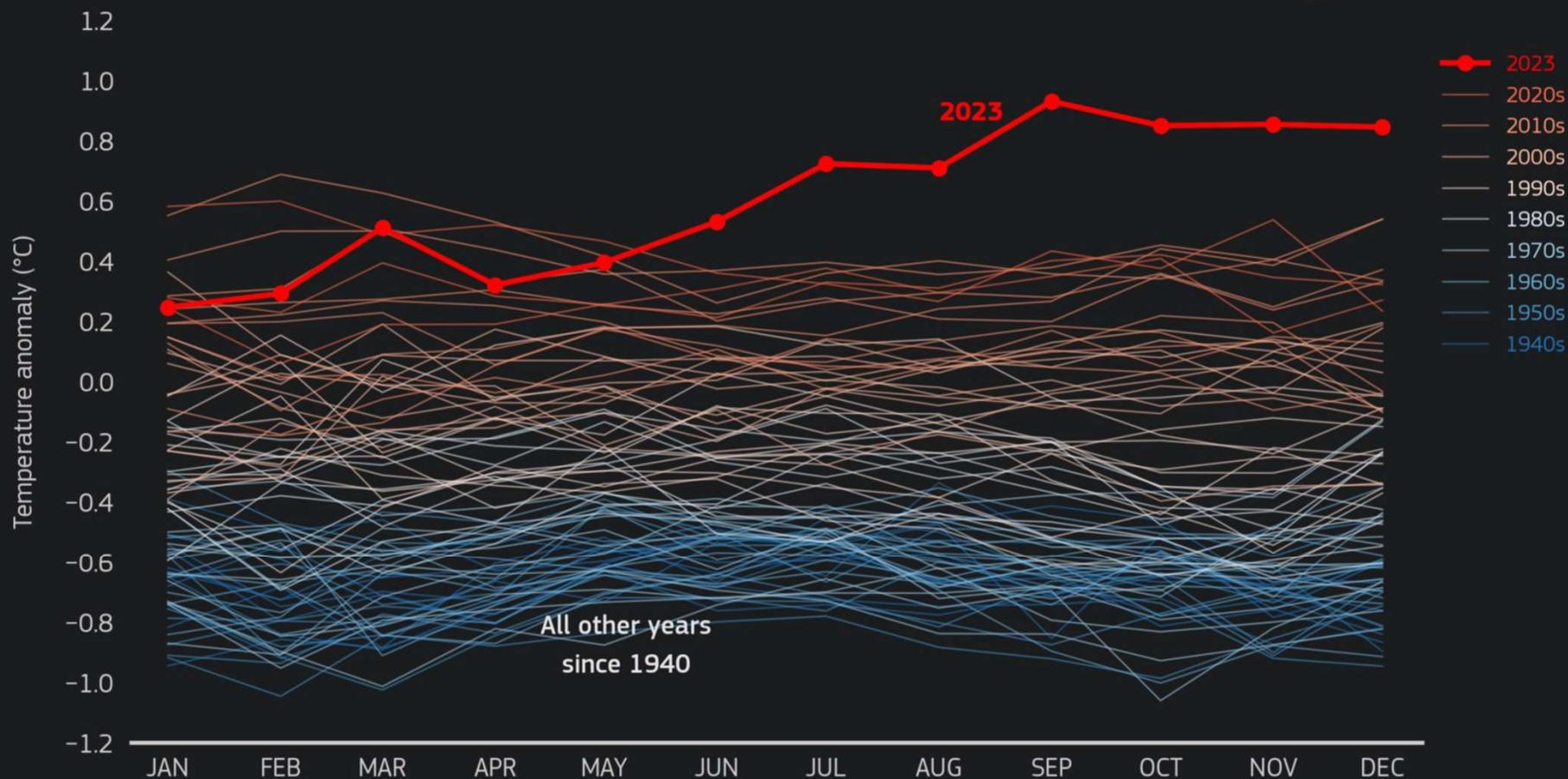
# 加速する気候変動

- 異常な2023年の世界の気温。産業革命前から1.48°C上昇。
- 2023年はすべての日が、工業化前から1°Cを越え、1.5°Cを越えた日も50%。
- 海水温も異常な高温。
- 2023年は、日本の年平均気温も1898年以降で最も高温。
- 森林火災、豪雨、洪水。

# 異常な2023年の世界の気温

## GLOBAL SURFACE AIR TEMPERATURE ANOMALIES

Data: ERA5 1940–2023 • Reference period: 1991–2020 • Credit: C3S/ECMWF



PROGRAMME OF THE  
EUROPEAN UNION



IMPLEMENTED BY



Climate  
Change Service  
climate.copernicus.eu



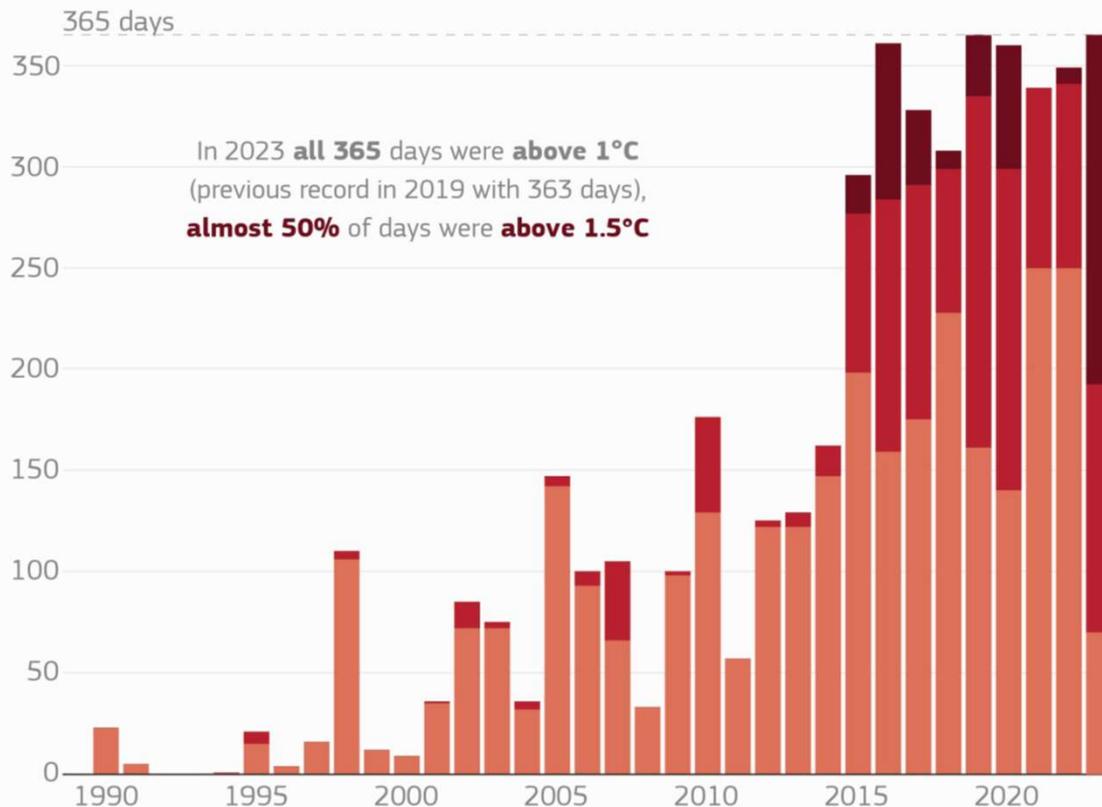
# 2023年はすべての日が、工業化前から 1°Cを越え、1.5°Cを越えた日も50%

## RECORD NUMBER OF DAYS ABOVE 1.5°C IN 2023



Number of days with temperature increase above pre-industrial level (1850-1900) within the following ranges:

■ 1 to 1.25°C ■ 1.25 to 1.5°C ■ 1.5°C or more



Data: ERA5 • Credit: C3S/ECMWF

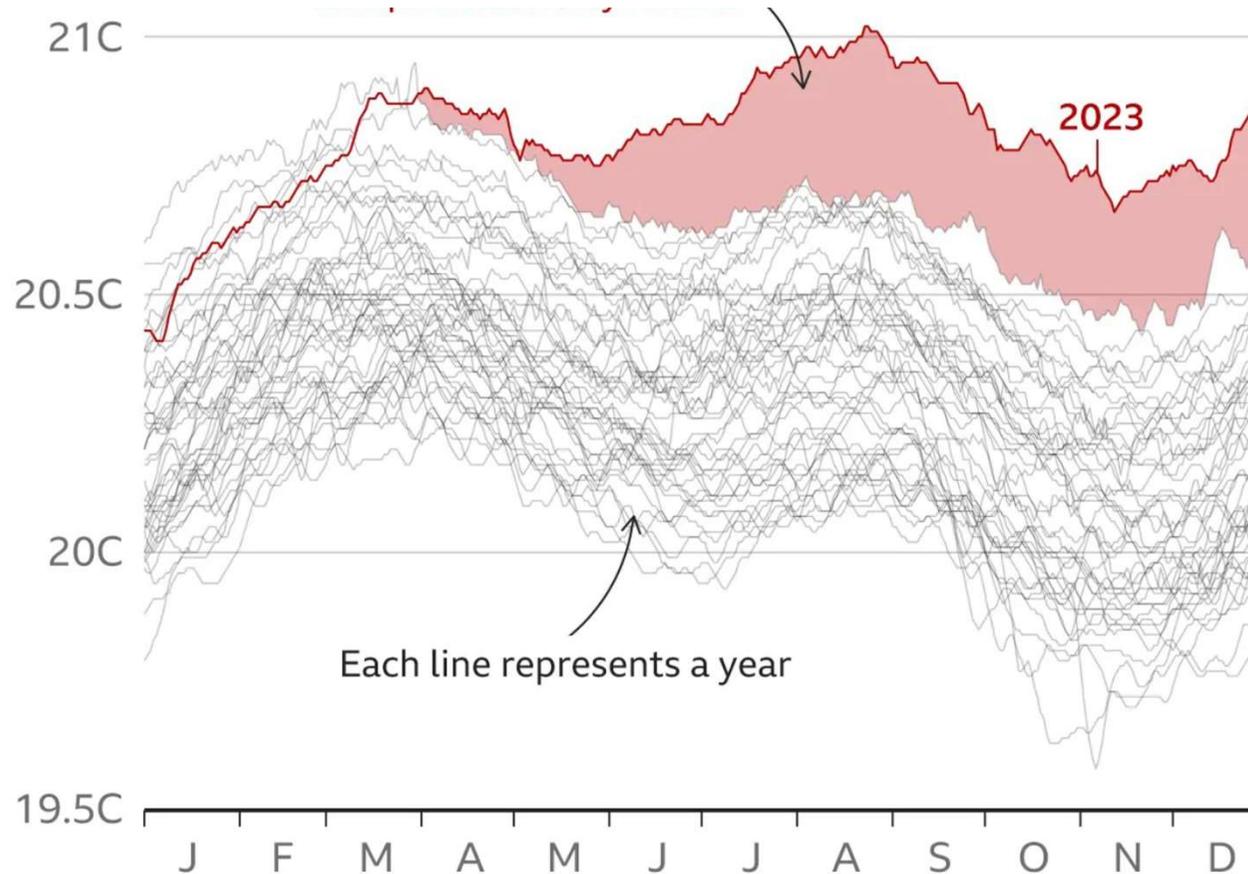


PROGRAMME OF  
THE EUROPEAN UNION



# 海水温も異常な高温

## 2023年とそれ以前の海水温との差



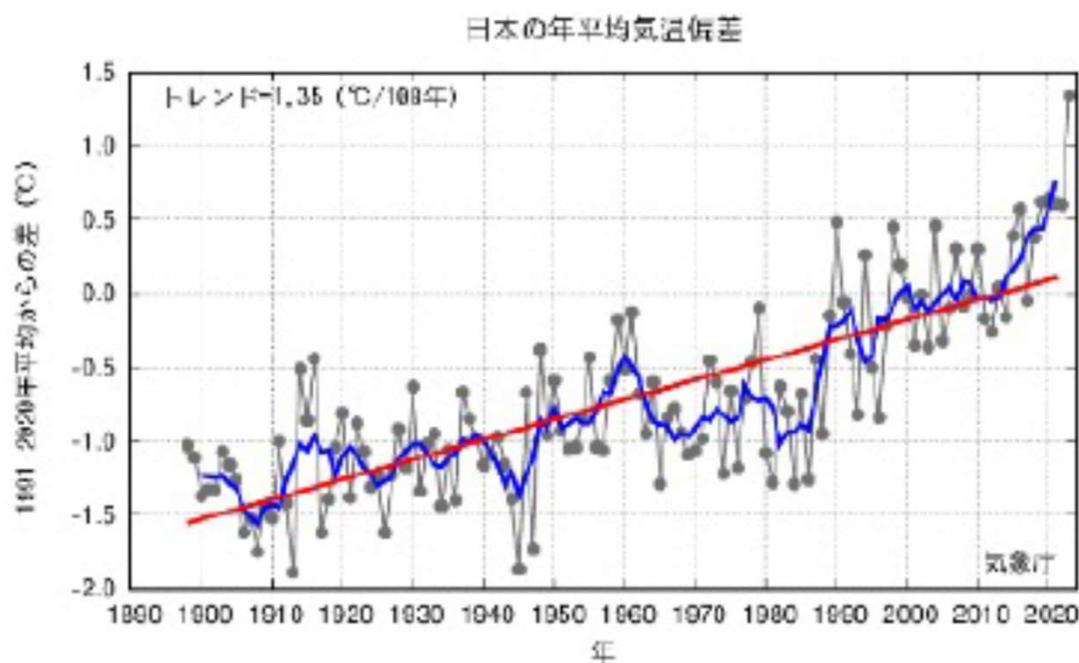
Note: Temperatures between latitudes 60° North and 60° South

Source: ERA5, C3S/ECMWF (data until 30 Dec 2023)

BBC

CASA

# 日本の年平均気温も過去最高



順位	年	気温偏差 (°C)
1	2023	+1.34
2	2020	+0.65
3	2019	+0.62
4	2021	+0.61
5	2022	+0.60

出典：気象庁2023年

# 地球沸騰化の時代



「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化 (boiling) の時代が始まった」

(グテーレス国連事務局長)

# 国際交渉の経緯

- 1992年 気候変動枠組条約に合意。  
\* UNFCCC: United Nations Framework Convention on Climate Change
- 1997年 COP 3 : 京都議定書を採択  
\* KP: Kyoto Protocol
- 2009年 COP15 : 合意に失敗
- 2015年 COP21 : パリ協定を採択  
\* The Paris Agreement
- 2023年** COP28 : ドバイコンセンサス

# COP28



# C O P 2 8

- 会 期 2023年11月30日～12月12日
- 場 所 アラブ首長国連邦（UAE）ドバイ
- 参加者 約10万人（過去最高）
- 会 場 ドバイ万博の跡地。
- ◆東京ドームの94個分。2025年の  
大阪万博の会場面積の2.8倍。

# COP28で何が話し合われたか

- 2050年に温室効果ガスの排出実質ゼロ = 脱炭素社会の構築するために、今何をすべきか。
  - 具体的には、各国の削減目標の引き上げを促すことができるか。
- COP27で決まった、ロス&ダメージ (L&D) 基金についての、運用ルールに合意し、始動させること。
  - **L&D** (損失と損害) : 適応できない、不可逆的な気候変動の影響。例えば、海面水位の上昇、南極や北極、グリーンランドなどの氷床の融解、サンゴ礁の消滅、氷河の融解、永久凍土の融解など。

# COP28で決まったこと

- 会議初日に、ロス&ダメージ（L&D）基金の運用ルールに合意。
- 2050年の温室効果ガスの排出実質ゼロ＝脱炭素社会の構築に向けた「UAEコンセンサス」を採択。
  - 途中で議長から、極めて弱い結締案が提案され、小島しよ国連合は、この議長案は「死亡宣告」で、サインできないと反発。最終的に、化石燃料からの「脱却を図る」との表現で妥協が成立。しかし、「化石燃料からの脱却」が決定に入ったのは初めてで、世界の環境NGOは高く評価。

# U A E コンセンサス

- ① 2030年までに、再生可能エネルギーの導入量を3倍にし、エネルギー効率の年率改善率を2倍にする。
- ② 排出削減対策が講じられていない石炭火力発電の段階的削減に向けた努力を加速する。
- ③ この決定的に重要な10年間で行動を加速し、(すべての)化石燃料からの脱却を図る。
- ④ 2035年までに2019年比で60%削減、2050年に排出ゼロ。
- ⑤ 再生可能エネルギー、原子力、CCUS（炭素回収・貯留・利用）を含む排出削減低排出技術を加速する

# 決定の「脱化石燃料」の表現

## COP 2 6、COP 2 7 決定

- 排出削減対策のない石炭火力について「**段階的削減**」 (phase down)
  - 「段階的**廃止**」 (phase out) ではない。

## COP 2 8 決定

- 「**2050年の排出ゼロ**」を達成するために、**すべての**化石燃料からの「**脱却**」 (transition away) を進める。**この決定的に重要な10年**に**対策を加速する**。

# 原発を削減対策に位置づけ

- 決定は、「再生可能エネルギー、**原子力**、CCUS（炭素回収・貯留・利用）を含む排出削減低排出技術を**加速する**」と記述。
- 原子力を削減対策に位置づけたには、極めて問題。
- 原子力を、2050年までに原子力設備容量を3倍化する宣言に、日本を含め23か国が署名。しかし、2050年までに原発の3倍化など不可能。
- **そもそも原発はCO2を削減しない。**
- **原発は、原爆由来の技術**であることを忘れてはならない。

# 日本はCOP28で二度の「化石賞」



12月3日に岸田首相  
のスピーチで受賞



12月5日にも石炭  
政策で受賞

# 岸田首相のスピーチ

- 排出削減対策の講じられていない新規の国内石炭火力発電所の建設を終了していく。
- アジア諸国においても、水素やアンモニアを混焼する石炭火力を拡大する。

# 化石賞の受賞理由

- 排出削減対策を講じている石炭火力は新設
- 日本の既存の170基以上の石炭火力を段階的に廃止する計画がない。
- 2030年に20%程度、水素・アンモニアの混焼を「排出削減対策を講じている」とするが、20%程度の削減は「**グリーンウォッシュ(見せかけの対策)**」。

\* IPCCは、「排出削減対策を講じている」とは90%程度の削減効果がある対策とする。

\* 20%混焼しても4%程度の削減効果しかないとの試算あり（気候ネットワーク）。

# 日本の課題

- 削減目標（NDC）の引き上げ。
  - \* 2025年2月までに2035年目標を提出が必要。
- 1.5°C目標に沿ったエネルギー基本計画の策定。
- 地域の脱炭素化。